

図書館報

光血

No.148



庄内刺し子に 出逢って

平田さしこの会会長 高橋 ひで

あなたたちの手で庄内刺し子を残してください。」

参加した私たちは、この日東北三大刺し子として津軽こぎん刺し、南部ひし刺しとともに

庄内刺し子が名を知らねている事を知り、庄内刺し子の伝統

をあらためて知らされたのでした。庄内刺し子の特長はその

模様にあります。しかしそれ以上

に強くひかれるその刺し子模様

に隠された「心」なのです。刺し子

は野良着が貴重だった頃に補修や

補強、防寒などを目的に生み出

された農村の生活の知恵だった

のですが一針一針刺して創り出

された模様の一つひとつには意

味があり、そこには刺す人の願

いが込められていたのです。「米

刺し」漢字の米に似ていること

から五穀豊穰を願って刺されて

います。「そろばん刺し」そろ

ばんの玉に似ていることから商

売繁盛を願って刺されます。

「菱刺し」菱の由来が無限に

びるということから家内安全

家族の繁栄の願いが込められ

ています。そのほか「柿の花刺

し」「矢羽刺し」「綱代刺し」

など四十種位の刺しがあります。

社会教育活動の一環として町

の支援を受けながら活動を展

開してきました。名前を付ける

ときも「平田刺し子」にしよう

か迷ったのですが庄内地方何

処にでもある刺し子だから、あ

えて平田の地名を付けず「庄内刺し子」として皆に傳承してい

ただこうと命名したことも昨日

のこのように思い出され

ます。針仕事が好きで始めた

「刺し子」が沢山の方々から支

持していただき各地で開催さ

れるコミニティセンター文

化祭には大きい作品、小さい作

品の区分けにはあるにしても

彼方此方で展示されているの

を見せていただく嬉しくな

ります。また、一年間つくった

作品を会員同士が持ち寄り酒

田夢の倶楽での展示即売で観

光客の方々から「素敵な作品に

出会えてありがとう」と声をか

けていただいた時は嬉しさが

倍増します。又、酒田の美術展

にも出しております。

技術の進歩でコンピュー

ター制御のミシンで刺し子の

模様も縫えるのですが、私た

ちは手刺しの温もりを大切に

して「庄内刺し子」をこれから

も手が動かせる間は刺し続け

て行きたいと思っています。そ

して次代を担う子ども達から

も総合学習で刺し子を学んで

いただいています。大人にな

っても誇りを持って「刺し子」

を続けていただきたいなど願

昭和五十九年一月「まちづく
り町民大会」で大川健嗣さん
「山形大学文学部教授」から
基調講演をしていただきました。
大川さんは講演の中で庄内
の刺し子について触れ、「庄内
では刺し子が昔から伝わって
います。以前、遊佐町に行っ
た時に主婦の方が作った刺し
子を見て、私はそのきれいな
かしさで大いに感動しました。
そして、それ（刺し子）は機
織で作られたものでなく手
作りなのでその感じが良く
伝わってききました」と話さ
れました。その会の会員とな
る人達が聴衆していたので
す。「どうかして興味とし
て刺し子をやってみたい」そ
う思い数人の仲間が發起人
となり平田と一緒に刺し子の
研究を始めたのがちょうど
昭和五十九年の二月のこと
でした。これこそ平田町の庄
内刺し子再生の出発点とな
ったのです。

町ではこのような動きを手
助けして行こうと、「農村生活
の中の刺し子」として農村環
境改善センターの事業の中
に位置付けました。そして
平田さしこの会、初代会長
だった故藤マ子さんの女
学校の同級生高橋閉代さん
が遊佐町で刺し子の保存に
取り組んでいました。私た
ちは有志を募り遊佐に教え
を請いに通ったのです。高
橋さんは快く私たちを受け
入れてくださり庄内地方に
伝わる刺し子の基礎を学ぶ
ことが出来ました。

講習が始まって間もなく受
講者たちは米沢市の山村精
さんが主宰する「出羽の織
座」を訪ね東北に残るさま
ざまな刺し子を目にするこ
とができました。そしてそ
の時に山村さんが口にした
言葉は、この日参加した私
たちの心に深く突き刺さ
ったのです。

「なぜ刺し子の勉強にわざ
わざ米沢まで来たのですか
、庄内には庄内刺し子とい
う素晴らしい刺し子がある
じゃないですか。庄内の刺
し子は東北を代表する刺し
子なのです。どうか

案外目にするここのない

白鳥の生態(四)

日本白鳥の会理事 角 田 分わかづ

目と見る

『目と目でじっと見つめ合う』という言葉は人間界で実際に使われますが、白鳥の行動でも実際に見られます。(写真1)

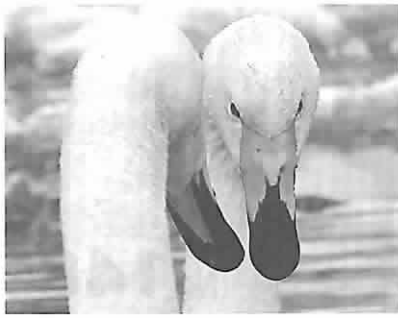


写真1 じっと見つめ合う2羽

うのです。何かを話しているのかどうかは分かりませんが、でも互いに何かを伝えようとしてることは明らかです。



写真2 ウィンクで見ると見ると興味あること、白鳥がわかる

この行動は、二羽が首をハート型にして近づき合うラプリング行動(行動名は私が命名)の中で結構見られるものです。白鳥の場合、目が顔の少し横についているので見つめ合う時に互いに顔を左右に振りながら、じっと見つめ合

ざわざウィンク(もう死語?)をしてものを見ることもあるのです。もっと正確に書くとしたら片方の目を瞑こらってもう一方の

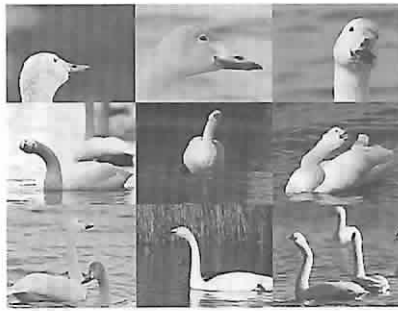


写真3 単眼視で注視

目だけで物を見るのです。(写真2)この行動だけでなく片方の目で物を見るということ、白鳥を観察しているとよく見られます。(写真3)

詳細についてはよく分かりませんが、白鳥は、物を注視する時には、くちばしを持ち上げて両方の目で見るとはなく、わざわざ首を傾けて片方の目(単眼視)で、そして全体的な状況の把握にはくちばしをその方に向けて両眼(視)で見ているのです。これも顔に目がついている位置が関係しているのかも知れませんね。

瞬くのは…

さらに面白いのは(私だけが面白いのかも)、人間の瞼まぶたは、ほとんどの人が上の瞼が上下しますが、白鳥の瞼は、

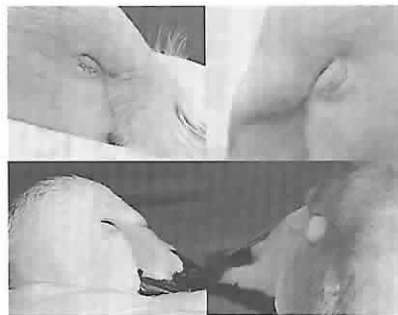


写真4 下のマブタが動く

下の瞼だけが動くのです。(写真4)
なぜ下の瞼だけが動くのかはまだ謎のままです。下の瞼が動くことより有利なことでもあるのでしょうか。

目には瞬膜が…

白鳥の目にも、瞬膜(正式には第三眼瞼さんがん)という自律神経に支配され自分の意志では動かさない膜)が眼球の上を覆っているのです。(写真5)瞬膜

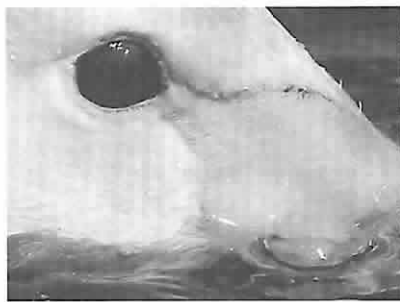


写真5 眼球の上の瞬膜

は目の乾燥を防いだり、潜水時に目を保護しています。興味あることにこの瞬膜は、瞼が上下動するのに対して、目先から目尻へと左右に動くのです。白鳥が、水中から頭を引き上げる時に目尻から目先へ動き、頭を水中に入れた時は目先から目尻へと左右に動い

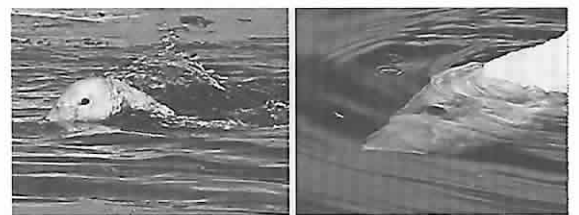


写真6 水浴びの時(左) 水中採食時(右)

ているのが分かります。勿論、前述したように水中採食や水浴びの時には目が開かれています。

も確認できます。(写真6)でもこの瞬膜が飛び出してしまふこともあるのです。(写真7)原因その他の詳しいことは、



写真7 飛び出した瞬膜

とは、専門の獣医師も分かりませんでした。獣医師によると白鳥のこの症状の前例では、次の日には元通りになっていたと言ふこともあるので、体調か何かの原因かも知れません。
白鳥の目の一つ取り上げても結構いろいろな働きや行動も観察出来ますね。

「庄内海岸松原再生計画」 の見直しに向けて

東北公益文科大学
教授 呉 尚浩

ここ十数年の間に、すっかり市民に定着した庄内海岸砂防林の森林整備ボランティア活動(注)であるが、読者のみなさんは「出羽庄内公益の森づくりを考える会」(以下「考える会」)の存在をご存知だろうか?この会は、一九九八年の大雪害をきっかけとして、急速に高まってきた砂防林の保全活動推進のために、二〇〇二年に生まれた保全関係者の協議会である。

当時、新たな保全の担い手として、住民・市民グループが複数立ち上がり、小学校の総合学習などを通じた学習林活動が盛んになってきた。そこで、山形県庄内総合支庁が呼びかけ、林野庁、国土交通省、鶴岡市、酒田市、遊佐町の担当部署、各森林組合、地域団体、NPO、山形大学、東北公益文科大学、小学校などの約三十団体が参加し発足。全国、海外から注目される庄内の地域共創の森づくりの中心となっている。

活動としては、年三回ほどの会議で互いの情報共有を図ることが中心であるが、発足当初より互いのフィールドを見学し合ったり、ボランティア研修会や保全活動のフィールドを共にするなど、現場から共に汗を流しながら、互いの地域的な必要の背景に対する理解を深めた上での議論を大切にしてきた。そのひとつの集大成が、二〇〇六年に一般財団法人(当時、財団法人)日本緑化センターが全国に募

集した「日本の松原再生事業」対象地第一号に採択され、その支援を受け二〇〇八年三月に策定した「庄内海岸松原再生計画」である。考える会メンバーの中で、大学、行政、地域・NPO団体を中心となり、緑化センターと共に作業を進めた。

この成果は、(1)計画策定の目的・経緯、庄内海岸砂防林の概要・沿革・現状と課題、松原再生の基本方針・維持管理計画、推進体制などをまとめた「庄内海岸松原再生計画」、(2)庄内海岸(砂丘地・丘陵地)における、飛砂の防備、潮害の防備、風害の防備等を目的とした森林造成、及びその管理についての方法を示した「庄内海岸林施業管理指針」を中心に、(3)「庄内海岸林ボランティアの手引き」、(4)「松原ボランティアガイドブック(未来の庄内海岸松原をみんなの手で)」、(5)「庄内海岸砂防林現状調査報告書」と合わせて五つの文書にまとめられている。

全体のテーマは「大いなる遺産を未来につなぐ庄内の海岸林」であり、(1)多様な主体の協働による保全活動の推進、(2)砂防林に対する理解を深める活動、(3)砂防林の利活用の推進、について計画がまとめられた。

この計画の内容的な最大の成果は、長らく懸案だった森林整備に関するゾーニング案をはじめ示した点である。昨今、森林整備のさまざまな場面で、針広混交林の考え方が浸透してきた。従来のクロマツ中心の海岸林整備だけではなく、適するところには広葉樹を導入して生物多様性を豊かにすることで、病害虫被害のリスクを軽減したり、また管理の省力化、コスト

軽減を図ろうとするものである。しかしながら、現場では、既存のクロマツ主体の保全の必要性の認識も高く、多様な主体が関わる現場では、保全方法に対する混乱も多々見られた。そこで、「砂草地」(最前線の海岸線の成立条件として極めて重要)、「クロマツ純林」(海岸地域の生活基盤として最も重要)、「クロマツ林」若干の混交を認め、(安定的に森林機能を維持)、「針広混交林」(自然植生を取り戻しつつある移行林)、「広葉樹樹林」(潜在樹種自然林として生物多様性に富む安定した自然林)の五つの目標林型によるゾーニングを設定したが、庄内地域全体を網羅する整備方針をはじめ示した点で大変意義深い。

その後、この計画の推進は「考える会」の中に「松原再生計画推進部会」を設置して行われているが、法律に基づく計画ではなく、関係者の同意による任意の計画であるために法的な拘束力は特にはない。しかしながら、官民を超えて、自分たちの内発的な思いを込めて策定した計画であるために、形式が優先してその心が見えないよくありがちな計画にはない、柔軟性と積極性があり、私はそれを大事にしていきたいと考えている。また、そのために、関係機関で担当者が変わるごとに、毎年度初めにその存在と内容を確認し合うことで意識を啓発している。

ところで、本計画は概ね五年に一度見直すことになっているが、二〇一三年度から当初の計画にはなかった「防災・減災」および「生態系保全」の視点を中心に「砂草地」「海岸浸食」「砂丘開発」など

の新たな視点を加味した見直し案について、検討してきた。現在、考える会の会長は私が務めさせていただいているが、具体的にはこの分野の研究に明るい山形大学の菊池俊一准教授をリーダーとする「見直し検討チーム」を立ち上げ、議論、執筆を進めている。公表にはいましばらく時間がかかるが、本稿ではその中でなされている議論のうち「防災・減災」面について、その重要性からも見直し案のほぼその通りを紹介し、読者の皆様といち早く分かち合っていきたい。

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災の津波被害により、海岸砂防林の津波に対する防災・減災機能が注目されるようになった。見直し案では、まず、その機能の主なものとして「津波の威力と速力を抑える機能」「津波により流された漂流物を海岸砂防林が捕捉する機能」「津波により流された人を海岸砂防林が捕捉する機能」「砂丘地形を形成する機能」の四つを挙げた。

庄内海岸砂防林においては、多くの太平洋沿岸と異なり砂丘地形が発達しているため、津波に対する防災・減災機能は高いと言われている。海岸砂防林というと植生にのみ目が行きがちであるが、標高を持った砂丘であることが肝要で、その砂丘地形を保つためにも海岸砂防林を健全な状態に保つことが必須である。加えて、海岸砂防林は連続する帯状林分、すなわちグリーンベルトとして保つことが重要であり、河川や道路等によりグリーンベルトが寸断された開口部があると、津波の威力が開口部に集中する恐れがある。このため、新たな開口部は極力設けないよう

にし、やむを得ず設ける際にも内陸部への直線的な津波の導線とならないための配慮が必要であることを示した。

また、砂防林があるから庄内地方は津波に強いと過信するのは禁物で、例えば、各河川の河口部や酒田市の港湾周辺等の人工砂丘の造成がなされていない地域は津波に対して脆弱であることが、山形県環境エネルギー部危機管理課が作成した「津波浸水域予測図」から見取れる。これらの地域には新たな人工砂丘の造成や構造物等によって高みを作るなどの何らかの対策を考える必要がある。

そして、津波に対して海岸林が持つ四つの防災・減災機能を発揮させるためには、砂丘地形を含めた海岸砂防林を健全な状態として保つことが大切であり、庄内海岸砂防林の保全活動は、この庄内海岸松原再生計画により、点ではなく面、そして帯としてつながりつつ展開される必要があることを提言した。

現在、山形県の新たな津波浸水想定が今年度末には明らかになる予定で、さらに海岸林の防災・減災機能に対する期待は高まっていくことだろう。松原再生計画の改訂版も、近く皆さまにお届けし、その重要性に関する議論が高まっていくことを期待している。

(注)その経緯は、呉尚浩(二〇一〇)「森と人の新たなつながりー多様な主体の共創による庄内海岸の森づくり」秋道智彌・鳥海山の水と暮らしー地域からのレポート」東北出版企画、をご覧ください。松原再生計画については、日本緑化センターHP参照。

吉野弘さんの詩をめぐる対話 第4回

「風の記憶」インタビュウの思い出

酒田・詩の朗読会 主宰 阿蘇 孝子
月刊SPOON元編集長 佐藤 晶子

佐藤 吉野弘さんの詩を読んで

いると、ときに酒田の風が四季の色彩や匂いをのせて、吹いてくる、と感じることがあります。以前、月刊「SPOON」で吉野さんが一年間の連載を快諾してくださったときは、とてもうれしくて、シリーズタイトルは、迷うことなく「風の記憶」にしたいと思いました。吉野さんの作品世界に吹く風は、われわれ読者のもとに吹いてくる。それでは、吉野弘さんという詩人は、どんな「風」を吹かせているのだろうか。今回は、そのことを考えてみたいと思います。

時間を過ごすことができました。

阿蘇 晶子さんと一緒に過ごして、北入曾のご自宅に伺ったとき、五月のゆるやかな風が入ってくる書齋で、吉野さんの「スキンスリップ」という詩の話になりました。「ふるさとの頬をこする／竹箒たけぼりのような吹雪」という、あの二行は、酒田の冬の風を体験した人間でなければ決して書くことはできないし、酒田の吹雪を頬に受けた人間だけが心底うなずくことができる詩ですね、という話をしました。そんな話の流れから「風のことを語らせたら、僕の右に出る者はいない」と吉野さんがおっしゃった。ならば、と私も冬の風の体験談をし、二人で

競うように話し合っ盛りが上ったことを懐かしく思い出します。

佐藤 あのとときは、酒田市ご出身の詩人、吉野弘さんの「風土性」をテーマにインタビュウしたいと考えていたので、主たる作品としては「スキンスリップ」と「雪の日に」、それから、走る海を描いた「冬の花」がまず念頭にありました。阿蘇さんがじょうずにきつかけを作ってくださったおかげで、吉野さんからは、いきなり「酒田の風」が吹きはじめたのでしたね。

その後、波には自浄作用があることを知りました。北の海が豊饒ほうじょうで、「生物の揺籠ゆかご」といわれるのも、このすさまじい、泡立つほどの波の攪拌かくはんが自らを浄化し、生き物を育んでいるということなのでしょう。この詩は、自己浄化への純粋な希求をも感じさせてくれる作品です。

阿蘇 第一詩集「消息」は、酒田の「餅もち(こだま)詩の会」から出版されましたが、収録作品「雪の日に」は、純白に生まれながら、やがて汚れざるを得ない雪の運命に思いをはせながら、吉野さんはなんと「誠実」をテーマに書いていらっしゃるんです。

阿蘇 一昨年一月十五日に吉野さんが亡くなられてから、吉野さんの作品にシンパシーを感じているたくさんの方と会いました。その方々と話をするたび、

ああ、吉野さんの誠実の種子が、あちこちに飛び、それぞれの心の暖かいところで育まれ、芽ばえはじめているなあ、とつくづく思います。そして、「誠実でありたい」という「雪の日に」の冒頭第一行が響き、頭に思い浮かぶようになりました。

佐藤 吉野さんの風といえば、合唱組曲「心の四季」は「風が桜の花びらを散らす」と始まり、「木が風に」では、樹木は風に恋しているかと歌われています。「祝婚歌」や「生命は」にも、生命讃歌ともいえるべき、清やかな風が吹いていますよね。

阿蘇 吉野さんの詩の中の風は、敵しく激しいだけではありません。たとえば「祝婚歌」の「健康で 風に吹かれながら／生きていくことのなつかしさに／ふと 胸が熱くなる」だったり、「生命は」の「あなたも あるとき／私のための風だったかもしれない」という、滋味のあるやさしく暖かい風も吹いている。酒田の冬のもの凄くつらい風を経験しているから、なおいっそう、そのぬくみを感じることが出来る。たしかに、「風を語らせたら吉野さんの右に出る者はいない」と思います。

佐藤 同感です。「風の詩人」の自負に満ちた豪語ですよ。



©SPOON 1991

吉野 弘

(よしの・ひろし 1926~2014)

酒田市出身。酒田市琢成第二尋常小学校、酒田市立商石組工業学校を卒業後、帝労組労働組合に入社。戦後は、労働組合執行部で活動。肺結核闘病中に詩作を開始。1952年、『I was born』で詩壇デビュー。1957年、酒田の「消息」詩集より第1詩集『消息』出版。1972年、『感傷旅行』で読売文芸賞を受賞。1994年、『吉野弘全詩集』を刊行。

◇光丘文庫希観本紹介◇
上田秋成自筆『春雨草子』断簡

光丘文庫古典籍調査員 田村真一

光丘文庫に上田秋成自筆の『春雨草子』の断簡がある。

『春雨草子』は『春雨物語』の現存する最初期の草稿と言われている。

上田秋成(一七三四〜一八〇九)は江戸時代後期に医師・俳人・歌人・作家・国学者として活躍したマルチな人物であった。

秋成は国学者・加茂真淵の門人である建部綾足(たけべあやたり)や加藤美樹(かとううまき)に師事し国学を学んだ。

秋成が名声を得たのは渾身の力を注いで学に励んだ国学ではなく、風俗小説いわゆる読本であった。

秋成三十五歳の時に書いた怪奇小説『雨月物語』や晩年に著した『春雨物語』などは日本文学史上に燦然と輝く作品となった。

『春雨物語』のテーマは大きく二つに分けることができる。

①古代の社会に題材を得た歴史的物語。

②人間の本质を描いた文学色を全面に押し出した物語。

『春雨物語』は現代人が読んでも共感を呼ぶ普遍的な小説と言える。

『秋成研究』(長嶋弘明著・東京大学出版会)には『春雨物語』断簡の変遷の経緯が詳細に記されている。

『秋成研究』によると、『春雨草子』断簡は京都の南禅寺雑掌で西福寺の向かい側に住んでいた磯谷家(いそがいけ)にあったもので、その後、磯谷家が酒田の佐藤良治氏に譲り渡したと言う。

『春雨草子』断簡は磯谷台陽氏(明治三十四年没)が、かつて秋成が住んでいた磯谷家別棟を修理した際、その壁の中から出てきたものである。磯谷家では秋成から貰った反古を襖の下張りや塵はたきに用いていた。

磯谷家から『春雨草子』断簡をもらった佐藤良次氏とはどのような人物であろうか。『荘内人名辞典』は次のように記す。佐藤良次氏(一八七一〜一

九三〇)は鶴岡に生まれ幼少時に酒田へ引越してきた。

酒田裁判所の給仕をしながら苦学して、明治二十四年、東京専門学校(現・早稲田大学)政治科に入学。

在学中は上田秋成の研究に没頭した。帰郷後、酒田新聞社に入り政治・文芸・郷土史等々の評論で活躍した。

雅号を北溟(ほくめい)、古夢(こむ)と言う。佐藤良次氏がどのようにして『春雨草子』断簡を手に入れたかは『山椒魚』『黒い雨』などの作品を書いた新興芸術派の作家・井伏鱒二著『雨月物語』明治翻刻本・佐藤古夢のことに詳しい。

井伏氏と良次氏の息子である三郎氏、四郎氏とは友人関係にあった。三郎氏は前本間美術館館長をつとめ郷土史家として活躍。また、四郎氏も文芸家として酒田の文化を牽引した。

同著による井伏鱒二氏の言を拾ってみる。(一部筆者修正)昭和十六年、酒田に遊びに行った際、四郎氏から『春雨草子』の「捨石丸」「天津をとめ」「血かたびら」「目ひとつの神」「歌のほまれ」などの断簡

を見せてもらった。四郎氏が言うには、良次氏が上田秋成のことを調べに京都に行った時、磯谷家の老主人が古襖の下貼に使用していた『春雨草子』断簡を譲ってくれたという。

磯谷家と良次氏の間で次のような掛け合いがあった。

良次氏が、口を開いた。
「上田秋成のことを話して頂きに伺いました」

「あんたはん、秋成はんのお書やしたものそないおすきですか」

家人が反問した。
すかさず良次氏は言った。
「はい、好きです。僕は一生、秋成の研究をするつもりです」

家人は良次氏の言葉に喜んで口を繋いだ。
「この家の襖の下貼は秋成の反古を使っているが、もし経師屋に貼替へさしてくれるなら、その古い下貼(春雨草子断簡)をみんな呉れてやる」

それで良次氏は貼替代を出して『春雨草子』断簡を貰い受けたという。

良次氏に、西福寺を訪ねたら秋成研究の手がかりがつかめるかも知れないと、助言した人物は『滝口入道』の著者。

高山樗牛こと高山林次郎である。

二人は酒田琢成学校の同級生であった。

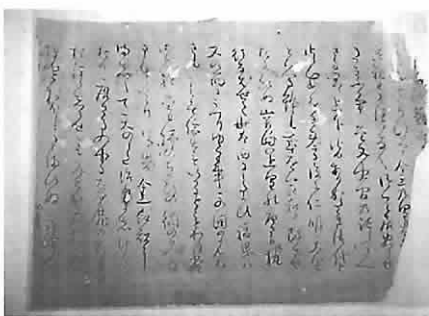
『春雨草子』の断簡は全部で八十四枚にわたる。その内訳(通し番号)は以下のようになっている。

「血かたびら」 1〜17
「天津をとめ」 18〜29
「目ひとつの神」 30〜69
「捨石丸」 70〜73
「長者ながや」 74〜81
「茶神の物語」 82〜84

断簡八十四枚は長嶋弘明・東大大学院教授が翻刻し、研究している。

『春雨草子』断簡は、佐藤良次氏の二男・佐藤三郎氏に引き継がれた。

平成五年、三郎氏により断簡八十四枚は酒田市へ寄贈された。



上田秋成自筆の『春雨草子』断簡



読書感想文

平成二十七年年度

酒田飽海読書感想文コンクール

〈中学校の部〉

○特選

いのちをつなぐ

酒田市立第四中学校

三年 渡部 七海



五月の連休が来ると、私は決まって曾祖母のことを思い出す。

「また遊びにおいで。」

そう言った曾祖母は、その一週間後に息を引きとった。自宅で、笑うように、そんな安らかな最期だった。

私は悲しくて仕方がなかった。「なぜ死んでしまったの？また遊びにおいでって言ったのに……。」そんなことをお葬式の間、ずっと考えていた。そ

の時、私は、身近な人の「死」というものを初めて経験した。

「死」とは、今までいた人がいなくなるということ。さっきまで笑っていた人が目を閉じてしまうということ。そして、二度と話ができなくなるというこ

と。七歳だった自分なりに、「死」を考えた経験だった。母を亡くした莉子は、新しい母を「かけがえのない存在」

だと感じる一方、亡くなった母を忘れていくことに深い寂しさを感

じている。そんなときに祖父の一周忌があり、莉子は実母のふるさとを訪れる。そこで莉子は不思議な旅に出る。少年の頃の祖父。そして亡

くなった母に出会う旅。私がおも、曾祖母のいた過去へ戻れるのなら……。祖父の小さいころはどうだったのか、そんなたわいもないようなことを、聞いてみたい気がする。戦後から七十年経った今、戦争中のことを聞いてみたいとも思う。

しかし一番にしたいことは「ありがとう」と伝えることだ。失ってから気づくのは遅いけれど、大切な人をこんなにもあっけなく失ってしまう

「死」。ああ、できることなら、曾祖母に会って「ありがとう」と

伝えたい。

莉子の祖父が、蓮の花を残してくれたように、私の曾祖母にも、残してくれたものがある。それは、「梅干し」だ。

私は幼いころから、体があまり丈夫ではない。特に暑さにはめっぽう弱く、脱水症状や熱中症を引き起こしていた。この夏も頭が痛いと言った私に、母がこんな提案をした。

「毎朝、梅干しを食べていけば。そうすれば、頭痛も和らぐんじゃない。」

皿にのった、一つの梅干し。他の梅干しと、見ためはなんら変わらない。しかし、食べてみると、確実に他とは違う。何かパワーを感じる。私は母に尋ねた。すると、母は、

「実はね、これは、ひいおばあちゃんが作った梅干しなんだよ。」

残念ながら、曾祖母が作った梅干しはもう無くなってしまった。しかし、「作り方」として我が家に確実に受け継がれている。曾祖母から祖母へ、祖母から母へと受け継がれる、夏の暑さに負けない、魔法のレシピ。

私はこの梅干しの作り方を必ず教わらなければならぬ。そして、母になって、おばあちゃんになって、子供や孫に

伝えていかなければならない。自分の年をとった姿を想像することなんて、今までなかっただけに、そんな自分が少しおかしかった。

いのちの尊さ、いのちのつながり……。誰もが大事なことでとどろく。大事なことでとわかっている。でも、頭での理解でしかない人がほとんどではないだろうか。

命という言葉は辞書で引くと、「生物を生かしていく根源的な力」とか、「生涯」「寿命」といった言葉が出てくる。どれも、間違っている。だが、命とは、そんな短い言葉で説明できるものだろうか。

私たちは、昨年の夏、言葉では表せないつらく悲しい壁にあたった。同じ学年の大切な仲間を一人失ったのだ。

彼とは一年生の時に同じクラスで、偶然にも最初の席が隣だった。違う小学校の人と、初めて話したのも彼だった。恥ずかしがり屋で目立つ人ではなかったけれど、とてもまじめで、とても優しい人で、私の話をうなずきながら聞いてくれて、彼と話していると気持ち

が落ち着いた。

二年生になって違うクラスになったが、委員会が同じ

だったので、仕事のことで少し話をした。私がアンケートの集計でまどっていた時に手伝ってくれた。それがあたり前すぎて、私は何も伝えることができなかった。

すべて過去形の話だ。何も伝えられなかったという後悔が渦巻いている。

今、私の周りには大切な人がたくさんいる。家族、友達、先生……。私はたくさんの人に助けられて生きている。頭でわかっている。しかし、「ありがとう」と言葉で伝えられているかという自信がない。特に家族。思春期も手伝って、「ありがとう」と言葉に出して言ったのは小学生のときが最後だったように思う。莉子は少女時代の母と出会うことができたけれど、そんなことがあったら素敵だけれど、そんなことは絶対になくても事実だ。後悔は繰り返したくない。自分が今できることは何か。

先祖からつないできた「いのち」をつなぐ精一杯生きる。それしかない。曾祖母、友、そして莉子に誓う。

酒田市立図書館ホームページ

<http://library.city.sakata.lg.jp/>

酒田市立中央図書館

酒田市立中央西町二番五九号

酒田市日吉町二丁目七番七号

電話(24)二九九六番

電話(22)〇五五一番